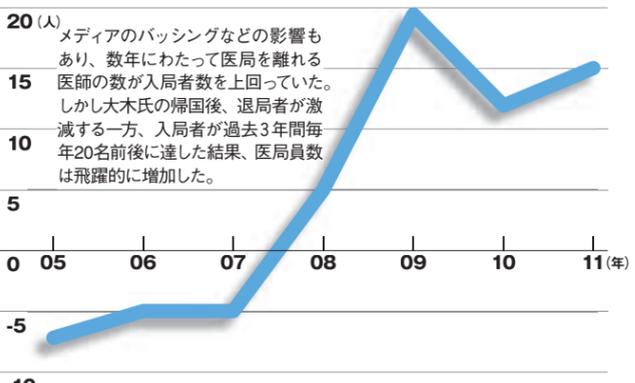


【グラフ2】 慈恵医大外科学講座 医局員数の増減



メディアのバッシングなどの影響もあり、数年にわたって医局を離れる医師の数が入局者数を上回っていた。しかし大木氏の帰国後、退局者が激減する一方、入局者が過去3年間毎年20名前後に達した結果、医局員数は飛躍的に増加した。

「収入が上がれば満足度も上がるというのは、幻想です。私自身、日米で無給医から年収1億円の教授職までを経験して、衣食足りる以上のお金は人を幸福にしないと確信しました」

そういつて、大木氏が見せたのは、給与と充実度の推移を示すグラフ(グラフ1)だ。大木氏が11年間の米国滞在を経て慈恵医大に戻るまでの収入と幸福度の浮き沈みが見て取れる。

「医師になった直後に幸福度が下がっているのは、当初在籍していた整形外科の教授から大木は幹部候補生なのだから手術は教授になってから覚えろ、それまでは基礎研究に専念しなさい、と言われたので外科に転科したからで

の満足感を高めようと、インセンティブ制の導入も議論されていますが、それは違うと思います。手術数や論文の数など客観的評価ができる物差しで報酬額が決まるアメリカでは、医師を含め、誰でもが、短期的に評価を得ようと必死でした。同期の医師も仲間ではなくて敵になる。勝者になっても、いつ足元をすくわれるかと疑心暗鬼で、私は肩書や給与には恵まれていますが、真の仲間がいない事から虚しさを感じていました」

日本でも新臨床研修制度が導入されて以降、似た雰囲気を感じるといいます。「若い医師は医局を離れて民間病院を転々とする。どこにも帰属しないから、周囲からの評価も得られず孤独感に苛まれる。もっとも分かりやすいお金で幸福を得ようとする医師もいますが、お金で得られるトキメキには限界がある。本当に必要なものは、喜びも悲しみも分かち合う仲間です」

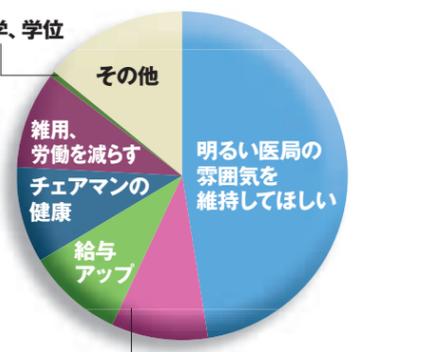
大木氏は、医局を一つの「村」と捉え、かつての日本で当たり前だった終身雇用を再現した。

「医局に在籍しているうちにはもちろん、将来開業する場合にも全面的に支援します。他学の教授として転出する際も最大限の応援をし、時には医局員の派遣もする。『村』ですから、医局員同

研究費の不正使用疑惑などでバッシングされている真っ只中にあり外科学講座も求心力を失い退局者が続出していましたので、迷わず一肌脱ぎたいと思えました。仲間のいる医局を再生し、母校の発展に貢献できる事は、お金で買えないトキメキだからです」

「我が国でもアメリカを見習って医師

【グラフ3】 外科医局に対する要望



慈恵医科大学外科学講座医局員を対象にしたアンケート。医局に対し、給与アップを望む医師は少数で、明るい雰囲気の維持が圧倒的多数だった。

士の絆を強める祭りも行います。毎月定例のチェアマン・夕食会は既に36回、一度も休まずに開催し、延べ約1700名の仲間と絆を深めました。医局員や学生など仲間たちが集まり自由に杯を交わす場です。私に用があれば個別に話すスペースも用意してあります。昇格人事の際の盛大な祝賀会にもお祭り効果があります。村に忠誠を誓うことで、安心感のみならず充実した気持ちで医療に専念できる環境が得られるのです」

患者に接する際の言葉遣いにも意識改革を行った。

「外科医が、『患者様』『拝見させていただけます』と過度にへりくだり、ムンテラも『この手術の合併症率は〇%です』と言いつつ入る。それを見ている若手は幻滅する上に、患者は不安

す。その後、良き仲間や先輩に恵まれ、胃がんや大腸がんなどの手術の修練に没頭していた頃は非常に充実していました。年収は1千万円弱でしたけど」

米国アルバートアインシュタイン医科大学に留学して最初の2年は無給研究員だったので貯金で生活を支えた。「給料がないことより、紹介状もなく渡米したので当初は米国の医師達に相手にされなかったことで幸福度が下がっています。その後、米国医師免許と永住権を取得し年収も2500万円に上がった事に加えて初めて米国で外科医としてメスを握れたため、充実度は少し上がりました」

しかし、ある時、大木氏の幸福度は一気に下がる。

「慈恵医大から帰国要請がきました。私は、もともと早く帰国したいと思っていましたから、当然、応じようとしていました。しかし、両親から帰国したら再び無給医になる事等の理由で猛烈な反対を受けた。『自分の志で家族を振り回すのはやめろ』と。一方で、慈恵からは『大学の援助金を受けて留学しているのだから、帰国しないならクビだ』と通告を受ける。辞表を書いたときの失意は、今も忘れられません」

その後、大木氏は慈恵医大を離れた寂しさを抱えながらも、アメリカで助教授、教授と華々しいキャリアを遂げた。教授だった時の年収は約1億円。

に駆られて細かな質問をしてくる。本邦ではそんなボタンの掛け違いが常態化していました。私が患者に言うのは『生懸命やることは約束します。だから、手術の詳細はお任せください』だけです。すると患者も『よろしくお願いします』となる。我々の世代が若手のロールモデルとなり、輝いている姿を見せれば、若手も外科学にもっと興味を持ちますし、憧れます」

こうした大木氏の発想は、今の若い医師には受け入れられにくいと思うかもしれませんが、しかし、慈恵医大外科学講座の入局者数は3年間で46人の増員。外科医局に求めることを聞いたアンケートでは「今の明るい医局の雰囲気を持してほしい」という回答が最多だったことが、医師の満足度を高めるものは何かを証明している。

大木氏は、「お金は水のようなものと表現する。

「アメリカで年収1億円をもらっても、その先には何もなかった。お金も水も、一定量は不可欠ですが、必要以上にあっても幸せにはほとんど寄りませ

ん。都内で1家3〜4人が暮らすなら、年収1000万で足りるはずで、それ以下の勤務医はほとんどいない。もし、現状に不満を感じる医師がいるとしたら、その不満をもう一度見つめてください。本当に求めているのは、お金ではなく、トキメキかもしれません」



大木隆生氏  
東京慈恵会医科大学 外科学講座統括責任者・血管外科学教授  
アルバートアインシュタイン医大血管外科教授  
1987年東京慈恵会医科大学卒業。同大第一外科を経て、95年米国アルバートアインシュタイン医大モンテフィオーレ病院血管外科研究員。05年から同院血管外科教授。06年に帰国し、東京慈恵会医科大学血管外科教授を経て07年から現職。

「お金は衣食のためには必要ですが、それ以上は高い車や服、豪邸などトキメキを買うツールでしかありません。そのトキメキの極みが、人に感謝されることです。ビル・ゲイツをはじめ、富豪と呼ばれる人は物で得られるトキメキに飽きて必ず慈善事業に行き着く。外科医であれば、患者、特に母国の患者に喜ばれることが何よりも人生を豊かにします。教授選への出馬を打診されたとき、慈恵は青戸病院事件や科学

日本の勤務医ではありえない高報酬だ。しかし05年、一度は辞めた慈恵医大から教授選への出馬要請があり、大木氏はあっさり承諾する。年収は10分の1にダウン。その条件を飲んだ理由こそ大木氏の言う「トキメキ」だ。

「お金は衣食のために必要ですが、それ以上は高い車や服、豪邸などトキメキを買うツールでしかありません。そのトキメキの極みが、人に感謝されることです。ビル・ゲイツをはじめ、富豪と呼ばれる人は物で得られるトキメキに飽きて必ず慈善事業に行き着く。外科医であれば、患者、特に母国の患者に喜ばれることが何よりも人生を豊かにします。教授選への出馬を打診されたとき、慈恵は青戸病院事件や科学

「トキメキ」のある医局こそ 医師の満足度を高める

収入の低さや労働環境、仕事内容に対する不満であれば、病院側と交渉したり、転職したりと自ら行動することで解決できる可能性がある。しかし、ある程度の収入があつて仕事自体に不満がなくても、なお満足度が低いケースもある。解決の糸口が見つからないまま高報酬の病院を転々としたり、漠然とした不満を抱えたまま診療を行う医師に対し、大木隆生氏(東京慈恵会医科大学外科学講座統括責任者・血管外科学教授)は、「衣食足りたら、トキメキ」を求めよ」と呼びかける。

「収入が上がれば満足度も上がるというのは、幻想です。私自身、日米で無給医から年収1億円の教授職までを経験して、衣食足りる以上のお金は人を幸福にしないと確信しました」

そういつて、大木氏が見せたのは、給与と充実度の推移を示すグラフ(グラフ1)だ。大木氏が11年間の米国滞在を経て慈恵医大に戻るまでの収入と幸福度の浮き沈みが見て取れる。

「医師になった直後に幸福度が下がっているのは、当初在籍していた整形外科の教授から大木は幹部候補生なのだから手術は教授になってから覚えろ、それまでは基礎研究に専念しなさい、と言われたので外科に転科したからで

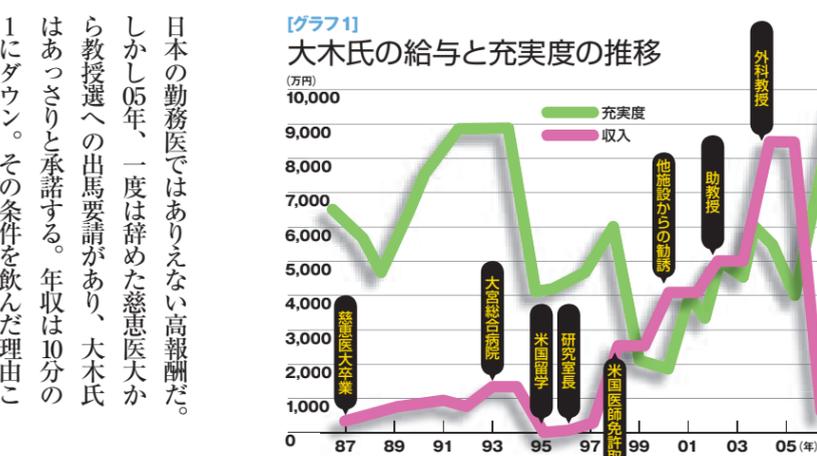
す。その後、良き仲間や先輩に恵まれ、胃がんや大腸がんなどの手術の修練に没頭していた頃は非常に充実していました。年収は1千万円弱でしたけど」

米国アルバートアインシュタイン医科大学に留学して最初の2年は無給研究員だったので貯金で生活を支えた。「給料がないことより、紹介状もなく渡米したので当初は米国の医師達に相手にされなかったことで幸福度が下がっています。その後、米国医師免許と永住権を取得し年収も2500万円に上がった事に加えて初めて米国で外科医としてメスを握れたため、充実度は少し上がりました」

しかし、ある時、大木氏の幸福度は一気に下がる。

「慈恵医大から帰国要請がきました。私は、もともと早く帰国したいと思っていましたから、当然、応じようとしていました。しかし、両親から帰国したら再び無給医になる事等の理由で猛烈な反対を受けた。『自分の志で家族を振り回すのはやめろ』と。一方で、慈恵からは『大学の援助金を受けて留学しているのだから、帰国しないならクビだ』と通告を受ける。辞表を書いたときの失意は、今も忘れられません」

その後、大木氏は慈恵医大を離れた寂しさを抱えながらも、アメリカで助教授、教授と華々しいキャリアを遂げた。教授だった時の年収は約1億円。



米国に滞在している間の充実度は、母校・慈恵に在籍している時代を上回ることはなかった。大木氏の充実度をもっとも高いのは、1億円の年収を捨てて年収1000万円の慈恵医大に戻ったときだ。